

## 鬼を語れば怪至る

ある冬の夜、君誨くんかいと韓愈かんゆう、柳宗元りゅうそうげんの三人で怪談を語り合つた。

ふと見れば、窓の外で光の点がちらちら光っている。まるで蛍が群れ飛んでいるようであつた。今は冬、しかも風が激しく吹きつけ、雪の降るたいそう寒い晩である。蛍が飛んでいるはずがない。三人はぞつとして顔を見合わせた。

見守るうちにも光の点はどんどん増えていき、幾千万にもなつたかと思うと、部屋の中に飛び込んできた。光は丸く集まつて鏡のようになつたり、ばらばらに散つたりをくり返した。やがて犬の吠えるようなけたたましい音を残して、いずこへか飛び去つた。

三人のうち、一番肝の太い韓愈でさえ真つ青になつていた。柳宗元と君誨は目を覆つて突つ伏すばかりであつた。

ことわざに、

「白日に人を談ずることなかれ。人を談ずれば害を生ず。昏夜こんや（暗い夜）に鬼を語ることなかれ。鬼を語れば怪至る」

というが、本当のこのようだ。

中国百物語

話梅子 編・訳

# もくじ

一話	寺の棺	9	十四話	孫元弼の怨念	44
二話	銭湯の怪	12	十五話	のっぺらぼう	48
三話	白骨怪	13	十六話	王居貞	50
四話	琵琶を弾く妖怪	17	十七話	盧賛善の花嫁人形	52
五話	白い手	20	十八話	蠟燭の天女	54
六話	被害者の声	24	十九話	牡丹灯籠	59
七話	真面目な雇い人	26	二十話	郭知運	72
八話	無鬼論(一)	29	二十一話	虎皮	73
九話	無鬼論(二)	32	二十二話	三官神の霊験	76
十話	掠剩児	34	二十三話	鬼妾	78
十一話	九子母堂の泥人形	37	二十四話	陳生	80
十二話	花札をする男達	39	二十五話	義虎	85
十三話	二つの鬼火	42	二十六話	旅籠の怪	88

二十七話	離れの女	91	四十話	孟蘭盆会	129
二十八話	形見	95	四十一話	秦巨伯	131
二十九話	雨の夜	97	四十二話	亡き息子	134
三十話	賭鬼	100	四十三話	阮瑜之と幽鬼	138
三十一話	犬と行者	103	四十四話	身分	140
三十二話	三世の怨み	105	四十五話	赤子の運命	142
三十三話	廿二娘	108	四十六話	僧侶と狐	144
三十四話	蚕	113	四十七話	赤岡店の怪	148
三十五話	死後の情欲	116	四十八話	応報	150
三十六話	死者の名簿	118	四十九話	鼠	153
三十七話	生まれ変わって	121	五十話	娘の魂	155
	怨みを晴らす(一)		五十一話	墮胎薬	156
三十八話	生まれ変わって	124	五十二話	地獄めぐり	159
	怨みを晴らす(二)		五十三話	線娘	162
三十九話	十文字	126	五十四話	陳勲の復讐	167

五十五話	陳纂	169	六十九話	髪を梳く女	210
五十六話	陳処士	171	七十話	宋術士	213
五十七話	葉生の帰還	173	七十一話	望み	215
五十八話	爪	179	七十二話	狼	217
五十九話	泥人形の子供	181	七十三話	余杭の広	220
六十話	同穴	184	七十四話	冤鬼	223
六十一話	鄂州の少将	188	七十五話	哥舒翰	224
六十二話	梵音	191	七十六話	棺の中の手	228
六十三話	碧瀾堂	194	七十七話	離れの怪	231
六十四話	杜伯	197	七十八話	吸血僵屍	233
六十五話	劉道錫	200	七十九話	虎になった男	236
六十六話	くし	203	八十話	口を吸う死体	239
六十七話	徐氏の姉嬢	205	八十一話	驟馬	240
六十八話	同名異姓	208	八十二話	秦進忠の死	243

八十三話	訪ねてきた友人	245	九十八話	魂の形	283
八十四話	馬奉忠	247	九十九話	目玉	285
八十五話	貧富の差	250			
八十六話	竇氏	252			
八十七話	墨繩	261	用語一覧		288
八十八話	身代わりを求める幽鬼	262			
八十九話	陳徳遇	264	あとがき		290
九十話	呪い	266			
九十一話	王僧侶	268			
九十二話	小路の女	270			
九十三話	楊羨と幽鬼	273			
九十四話	明器の反乱	275			
九十五話	黄衣の男	277			
九十六話	虱	279			
九十七話	離縁状	281			

一話 寺の棺

宣和五年（一一二二）のことである。唐信道とうしんどうが試験を受けるために、会稽かいけいから錢塘せんどう（どちらも浙江省）に向かつて旅をしていた。その途中、普濟寺に泊まった。

寺の一番奥の空き部屋に、棺が安置してあった。家族が預けていったものだという。信道が棺を見せてほしいと頼むと、僧侶は、

「これは女性にょしやうの棺です。ふたが半開きになっていて、時折、棺の主が抜け出しては、生きた人間のもとへ忍んで行きます。一人である部屋に入るのは危険です」

と言って止めた。信道は、

「秀才が幽鬼を恐れる道理などありませんでしょうか？」

と笑って、止めるのも聞かず、一人で見に入った。棺の上には、

「某王宮幾県主之棺」

と記されていた。県主とあることから、皇族の娘の棺であることがわかった。また、

その日付は四十年前のものであった。僧侶の言葉通り、半開きになったふたの間から、死体の顔が見えた。

年の頃は二十歳を少し過ぎたばかり、まるでつい今しがた化粧したばかりのようで、生きている人間と少しも変わりがなかった。信道はぞつとして部屋を出た。

後に会稽に戻って、このことを呉材老ごさいろうに話した。すると、材老は、「そんなこと驚くに足りないよ」

と言つて、次のような話をしてくれた。

材老が余杭よこしょう（浙江省）のある寺に滞在していた時、僧房に皇族の娘の棺が安置されていた。娘は夜な夜な棺を抜け出しては、僧侶と酒を飲んだり、歌ったりし、やがて僧侶と情を通じるようになった。

このようなことが二年も続き、やがて娘の父親の耳に届いた。父親は死んでいるとはいえ娘のふるまいに腹を立て、死体を焼くことにした。

すると、娘が母親の夢に現われ、涙ながらに訴えた。

「私は不幸にも早死にしましたが、前世の縁であのお坊様と結ばれました。私のふしだらを、お父様、お母様が恥と思われることは重々承知です。しかし、私のお腹にはすでに子供が宿っております。もしこの子を産むことができなければ、私は未来永劫

あの世をさまよわなければなりません。どうかお願いします、あと三月だけ待つて下さい。その後なら、焼いて構いません」

母親は泣きながら目を覚ました。父親はこのことを聞くと、怒つて、

「死んだ身でありながら、あろうことか坊主などと乳繰り合いおつて。その上、子供を産ませてくれたと？ どこまで親の顔に泥を塗れば気がすむのだ」

と、死体を焼く決心をますます固めた。

その夜、娘は母親やほかの家族の夢に現われ、さらに悲痛な様子で何度も訴えた。翌日、母親以下、一家を挙げて、父親に死体を焼くのを猶予するよう懇願した。父親は頑固な人だったので、ますますいきり立った。すぐに葬儀屋を呼ぶと、棺のふたを斧で破り、薪の上で火をかけさせた。

死体の腹はふくれていた。しばらくすると、腹が裂け、中に胎児の姿が見えた。胎児はすでに形を成していたという。

（宋『夷堅志』）

## 二話 錢湯の怪

金陵城（南京）の常府街に白石浴室という錢湯があつた。なかなか繁盛しており、朝から晩まで大勢が入浴するのだが、湯船の湯が濁らないそうである。これもうわさであるが、うわさによれば、湯船に神がいるので湯が濁らないそうである。これもうわさであるが、この神は毎年、客を一人食らうとも言われていた。錢湯の主人はこのうわさを隠していたのだが、毎年一度、店を閉じる時、着物と履物が一人分残ることがあるのは事実であつた。ある晩、湯船に浸かっている時、客の一人がふと思ひ出したようにこの話をした。

「馬鹿らしい。そんなことあるかよ」  
他の客達は笑つて信じなかつた。

その晩、店を閉じる時、着物と履物が一人分残されていた。持ち主は一体どこへ行つてしまつたのだろうか。

（清『虫鳴漫録』）

## 三話 白骨怪

汝南（河南省）の人、周濟川は揚州の西に別荘を所有していた。兄弟はいずれも学問好きで、この別荘で一緒に勉学にはげむのが常であつた。

その夜もいつものように学問を終えて、夜中の三更（深夜十二時）頃、それぞれ部屋に下がつて就寝した。濟川が頭を枕に載せると、突然、窓の外から妙な音が聞こえた。カクカクと物のきしむような音で、いつまで経つてもやまない。濟川が窓のすき間からのぞいてみると、子供の白骨が庭を駆け回つていた。白骨は腕をふりながら駆け回り、カクカクというのはその骨のきしむ音であつた。

濟川は兄弟を起こして、しばらくその様子を見守つていた。弟の巨川が追い払つてやろうと大声で怒鳴りつけた。すると、その声に應ずるように白骨は跳ねながら階段を登つてきた。もう一度怒鳴りつけると、部屋の中に入つてきた。三度目には、寝台に上がつてこようとする。巨川が叱りつけると、白骨は言つた。

「おっかあ、お乳をおくれよう」

巨川が拳で打ちかかると、白骨は寝台からピョンと飛び降りたが、またすぐに寝台に飛び上がってくる。その身軽なこと、まるで猿のようであった。

騒ぎを聞きつけた家人が手に刀や棒を持って集まってきた。白骨はそれを見回して、なおも言った。

「おっかあ、お乳をおくれよう」

家人が一撃すると、白骨は関節がはずれてバラバラに散らばった。しかし、すぐにまた集まって元通りになり、

「おっかあ、お乳をおくれよう」

と言う。このようなことが何度も繰り返されたが、家人は頭から袋をかけてようやく捕まえた。

「おっかあ、お乳をおくれよう」

袋の中からも白骨は言った。

城から四、五里（この時代の一里は約五六〇メートル）ほど離れたところにある古い枯れ井戸にその袋を投げ込んだ。

「おっかあ、お乳をおくれよう」

井戸の底から、白骨はなおも言い続けた。

その翌晩、白骨はまたもや姿を現わした。昨晚自分が押し込められた袋を手にとり下げ、それを投げつけ、好き勝手に跳ね回った。家人が大勢で取り囲んで、昨晚のよううに袋ですっぽり覆った。今度は太い縄で縛り上げ、おもりとして大きな石を結びつけて川に放り込むことにした。

担いで運び出すとすると、袋の中からこういう声が聞こえた。

「また、夕べのように客なりに来るからな」

果たして、数日後、またもや白骨は現われた。左手には自分が押し込められていた袋を、右手には断ち切られた縄を持っている。また庭中を駆け回るのであった。

家人はあらかじめ大木の中をくりぬいて、皮を張っていない太鼓のようなものを用意しておいた。白骨を捕らえると、その中に押し込め、上から大きな鉄のふたをかぶせ、嚴重に釘で打ちつけた。さらに鉄の鎖で大石を結びつけ、揚子江に流すことにした。

担ぎ出そうとした時、中の白骨は、

「棺を用意してくれてありがとう」

と言った。



以来、子供の白骨は二度と姿を現わさなかった。この事件は貞元十七年（八〇一）に起きたといわれている。

（唐『広異記』）



#### 四話 琵琶を弾く妖怪

呉の赤烏三年（二四〇）のことである。句章（浙江省）の楊度ようたくという人が、夜、馬車で出かけた。

途中、人気のない道端に琵琶を持った少年が一人立っており、馬車に乗せてくれと頼んできた。困った時はお互い様ということで、楊度はころよく承諾した。馬車に乗り込むと、少年はお礼にと言って、琵琶を数十曲弾いて聴かせてくれた。なかなかの腕前で、楊度も気持ちよく聴いていた。曲が終わった途端、柔和だった少年の顔が鬼のようになり、眼をぎらつかせ、舌を吐いた。楊度が驚いているうちに、姿を消した。

恐ろしくなった楊度が一刻も早く人家のある所へ出ようと馬を飛ばして二十里（この時代の一里は約四三〇メートル）ほど行くと、今度は老人が道端に立っていた。今度も化物かもしれない、と疑った楊度が無視して通り過ぎようとする、哀れそうな

声を出して、  
「怪しい者ではございません。疲れてもう歩けないのです。哀れな老いぼれと思し召してどうか乗せて下さい」

と言った。楊度もその老人の様子を見て哀れに思い、乗せてやることにした。老人は再三礼を述べて、馬車に乗り込んだ。夜道に行く内にだんだんと打ち解けてきた。また、楊度も先ほどの衝撃が薄れて来たので、今しがたの自分の体験を老人に話して聞かせた。

「えっ？ 妖怪ですと？」

老人は話を聞くなり震え上がった。楊度はこの人のよさそうな老人を脅かしてやろうと続けた。

「ええ、私はまだ若いからいいけど、あなたはお年を召してらっしゃるので、お気をつけなければ。こんな夜更けにあのような恐ろしい目に遭うと心の臓が止まるかもしれませんよ」

老人は慌てたように訊ねた。

「一体、どんな様子をしていました？ 顔は？ 是非、お聞かせ下さい」

「そやつは琵琶を弾くんですよ。そして……」

「琵琶ですか。琵琶なら私も……」

後ろから、ポロンと琵琶をかき鳴らす音が聞こえた。驚いた楊度が老人の方を向くと、そこには先ほどの妖怪が坐っていた。

「あっ！」

と叫んだ途端、楊度の目の前が暗くなった。

立ち読みサンプル  
はここまで



(六朝『搜神記』)